



## Survey of school damages and the initial stage recovery after the 2013 typhoon Haiyan, Leyte province, the Philippines

災害科学国際研究所 助教 Carine J. Yi

### ・目的

SAFE 2015: 6<sup>th</sup> International Conference on Safety and Security Engineering において、2014年行なったフィリピンにおける台風ハイエンの学校のダメージ調査と復旧状況に関する調査の成果報告を行うと共に他研究の情報収集を行なう。2014年大洪水に対して被災者にインタビュー調査を実施し、ザグレブ市においては、自然災害に対する情報収集：土砂災害危険地の遠方からの確認と災害関連施設の視察を行なう。

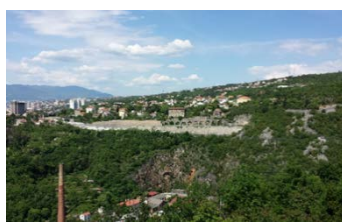
### ・旅程

- 行き先: クロアチア, オパティア + ザグレブ
- 行事主催者名: Wessex Institute of Technology, UK
- 日程: 平成27年5月5日-13日
- 活動内容: 学会での報告, 2014年の大洪水について情報収集を行なう (オパティア), JICAとのクロアチア土砂・洪水災害軽減プロジェクトの一環として設置された施設を視察(ザグレブ)

### ・講演等内容について

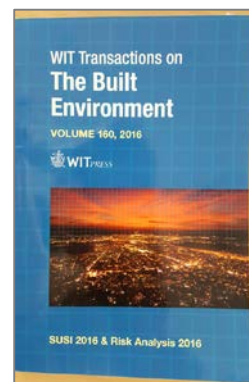
2014年災害科学国際研究所のタスクフォースチームの一員として参加した、フィリピンの小学校における台風ハイエンの被害調査と緊急段階の復旧に関する調査結果を研究成果として報告した。大規模自然災害は、広域にわかり一瞬して日常生活を脅かす脅威であるため、いち早く復旧が望ましい。復旧においてもソフト面やハード面の両方からのサポートを要する。世界各地から調査チームと支援活動があったが、一時的な支援と長期的支援の面から考えても、コミュニティの中心にある、小学校の復旧は速球に復旧しなければならない。その小学校の被害調査の結果とそれに伴う復旧について調査した結果をこのように国際学会において報告を行い、議論し、正解へ発信することができた。

(写真：左下：発表時の様子、右下：ザグレブ市の斜面の土砂災害危険地)



### ・本制度を利用することによって得られた効果

国際会議に研究成果を報告するには、多額の経費がかかるが、助教は、活発な研究活動を行なえる可能性に比べ、十分な予算の確保が難しく、調査か研究報告、あるいは論文の投稿の中から選択を狭まることが一般的であるため、このような支援は、な助教の立場では大変ありがたいものである。本支援がなかったら、得られなかった成果であり、今回の成果は「Proceeding of the SUSI 2016 & Risk Analysis 2016」に掲載された。



### ・研究内容紹介

私の研究課題は、「災害学」をRisk Engineering & Risk Management からのアプローチを取っている。災害そのものに対するメカニズムの究明のみならず、災害が結果的にもたらす人間社会における被害と改善への努力を問題意識とする。伝統的に、災害研究は、災害発生→緊急対応→順次対応：復旧→復興へのサイクルをたどり、最近では復興の後に減災が加わっている。しかしながら、災害を受け、立ち直るまでの全ての過程は、人間の個人的なイベントとして帰結するため、事実上、上記の災害経験プロセスは、個人としての対応になる。日本には、災害を自然災害と定める傾向がなきしろあるが、災害を個人的な悲劇イベントとして考えると、人災やテロによる被害、むしろイジメも規模の小さい災害、即ち“災難”として説明することができる。あらゆる災難から災害から身を守るには、個人はもちろん、社会と一緒に努力をしなければならない。